

ISSN 1882-0107

Journal of Institute of
Buddhist Culture

Musashino University

Vol. **XXIV**

2008

The Institute of Buddhist Culture

武蔵野大学仏教文化研究所紀要 抜刷

平成二〇年三月三一日

(翻訳)

臓器移植と仏教の生命尊重

アグネス・妙珠・エンジエエスカ

(ポーランド浄土真宗サンガ主管、医学博士・哲学博士)

(訳) 村石恵照

(翻訳)

臓器移植と仏教の生命尊重

アグネス・妙珠・エンジエエスカ

(ポーランド浄土真宗サンガ主管、医学博士・哲学博士)

(訳) 村石恵照

序

この発表(1)は、実験データにもとづく科学的な分析でもなければ、他の人の結果や思想にもとづくものでもなく、筆者が医師として、神経科学の研究者であり西欧社会の一員として、さらに浄土真宗僧侶として日本の寺院で働いてきた自分の人生をとおして到達したいいくつかの結論からなるものです。

臓器移植と仏教の生命尊重

我々のほとんどは、死について考えることを好まないのですが、死とは我々すべてに起こる唯一の出来事です。死は、全人類が免れえない唯一のことであり、ほとんどの人々が恐れるものであります。仏教徒として、我々が教えられていることは、我々は、身体は消失しますが、実は死なないのだということでもあります。そのように信じたとしても、我々は自分の死に対して快いわけではありません。その理由は我々が死に相当するものを経験していないことにあります。少なくとも、我々のほとんどは、生存中に記憶する限りにおいて死を経験してはいません。

I

私は自分の人生において死を生き抜いた一人であり、その経験は私の生き方に強い決定を与えました。二十歳のとき、ワルシャワの医学大学の学生でありましたが私は交通事故で重傷を負いました。この不運の直接の結果として私は、自分自身が自分の身体から分離していることを発見しました。その時私は、自分自身を苦痛に満ちて道路に横たわっている若い女性として一定の距離から眺めていました。私は死に瀕していました。その時、その身体は自分自身ではありませんでした。私は、ただ幾分高いところに見下ろしていました。私には幾人かの人々が救急車を呼んでいるのが見えました。私は一人の兵士が私の財布を拾い上げているのを見ました。彼はそれを開いていましたが、私はなぜだろうかといぶかしく思っていました。するとただちに私の見えない眼球がズームレンズのように機能して、私は彼の近くにおいて彼の行動を見ることが出来ました。彼は

私のIDを見て私の家族を呼ぶことが出来たのでした。私には自分の頭から出血していて一部の骨が折れているのが見えました。

しかし、私がつとも驚いたことは「わたし」はこの身体ではないという突然の認識でした。私はその時感じたことは自分の人間の身体が一度破壊されてしまえば放棄されてしまうような、なにか便利な乗り物のようなものであったことです。私は何ら身体をも持っていなかったのですから、私の思いどおりのスピードで動くことが出来ました。私は耳を持っていなかったのですが、そこにいた人々が言っていることを聞くことが出来ました。私は目を持っていなかったので、私の視界は一種のズームレンズのような機能をもっていました。私は壁を通してさえ見ることが出来ました。私は信じられないほど自由でした。ある瞬間には、このような経験をかっつて幾度も経験したにちがいない、という考えが起りました。救急車が来たとき、ある種の力によって私は自分の身体に戻されて、それから私は三ヶ月間意識を失っていました。私は非常に幸運だったのです。一九六二年のことでしたから臓器移植は普及していませんでした。

すべての人々は利用できる医療を平等に受けることができましたが、当時は我々ポーランドの医学界では、脳は（他の器官が機能停止した後の）最後の器官であると考えられていましたから、人の死は、当人の一切の身体器官が完全に機能停止した時のみ正式に死が宣告されたのです。

さらにポーランドの旧法律では、国民は最後の呼吸停止後三日以前に人を埋葬することが禁じられていました。しかしまれな例として強硬症があり、それは専門医を困惑させるものでした。ある種の薬草は人をあたかも死んだようにみせかけることが出来たからです。私は幸運であったという他はありませんでした。医師たち

は私の体を無料の臓器として使うのではなく、昏睡状態にある私を最善を尽くして生きながらえるようにしました。さらに私にとって幸運であったことは、身体がなくても自分は感じるということに覚えていたことです。すべての人が死ぬ時には同じ経験をすることは私は信じています。しかし、ほとんどの人は生き返った時に、その出来事の記憶を失ってしまうのだと思います。

身体という形態を離れて「わたし」が存在するという経験は、私を脳と神経組織の専門家である神経病理学者として脳組織を解析する専門家になるきっかけとなりました。

しかし一方自分の専門に加えて、私は個人的な研究に取り掛かりました。それはヨーロッパの歴史と自分の母国の歴史、そして哲学と理論物理学でした。医師となることの最も魅力的な部分は、少なくとも自分にとっては有名なギリシャ人、ヒポクラテスにまで遡る医学倫理の伝統でした。

医者として宣誓する人はだれでも、すべての人を平等に治療しなければなりませんし、個人的な事情にかかわらず、すべての患者に差別なく可能な限りの最善の医療を施さなくてはなりません。ヒポクラテスの宣誓は、医者たる者の基本的精神を教えています。

私はヒポクラテスの倫理(2)を誇りとしています。それは長い年月に耐えてきました。第二次世界大戦のような世界の終末のような時代においてさえ、ほとんどの医師や看護婦たちは自らの生命の危険を冒してまで敵方の人々の命さえも救おうとしていました。ヒポクラテスの倫理的価値観はテンプル騎士団の赤十字として表明されています。それは無防備の医療行為の印であり、それを犯す者には厳しい恥辱がもたらされるものです。私は、すべての人々を平等に治療するという伝統の一部となりたかったので、自分は医療行為の道を歩む

ことに導かれていったわけです。

そして私は医者としての指定された義務を果たしていましたが、人間の命の意味、特に自分自身のいのちの意味についての探求を始めました。

II

我々は、どこから来たのか？ 我々とは何か？ われわれはどこにゆくのか？ これまで、すべての文化で、様々な形で、このような究極的な始原の問題が哲学者や神学者たちにかかわってきました。我々は自分たちのいのちのつながりを世代を通して、動物の祖先にまで遡って初期の生命や原生命にまで、原初の宇宙で合成された要素まで、さらにそれ以前の空間に置かれた明確な形のないエネルギーにまでたどる事ができます。

しかしながら問題は、もしも、なんらかの意味の始まりがあるとして、いったい真実の始原とは何であったのか？ということなのです。

アリストテレスは「無は無からは生じない」という原理を提起しましたが、もし宇宙が「無であることから何かであること」にならなかつたとしても、それは常に存在してきたに違いないのです。時間は過去と未来に永遠に延長しているにちがいないのです。人々は長い間、時間が永遠が限定されているか、宇宙が常に存在していたかどうか、それは明確な始まりがあったかを議論してきました。

アインシュタインの一般相対性原理は、(宇宙の) 限定性を示唆しています。今日、我々はビッグバンの瞬

間から宇宙は拡大していることを目撃しています。アインシュタインの理論によれば、我々はビッグバンに近い何ものをも研究することはできません。

しかし重力に関する量子理論は、新たな宇宙の誕生に近いところで活動するのです。ひも理論は、いわゆる量子のひもと呼ばれる新たな基本的な定数として最小の長さの量子を導入しました。ひも理論によれば、ブラックホールの内部にはいかなる不定の密度もないのです。ビッグバンは起こったかも知れませんが宇宙はそれに先行しているのです。時間は始まりも無く、したがって終わりもないでしょう。我々の宇宙はほとんど空虚に始まり、ビッグバンにまで作り上げられ、その時点から生と死のサイクルを通して展開してきたのです。前ビッグバンの時期が現在の宇宙（コスモス）を形作ったのです。ビッグバンは宇宙の究極的な起源ではなく一つの変遷に過ぎないのです。

宇宙は永遠に存在してきました。我々が十次元、時間を入れて十一次元の存在を受け入れれば、そこには一定の質量はもはやありません。物質はその原初の定数において、力学的に価値を適用できる場 (field) として、実に電磁場のように可視的です。ひもは無限を嫌います。ひもは無限小の点に解体することは出来ません。それは過去と未来の双方において宇宙の永遠の性格を条件づけています。

一切はエネルギーなのですから一切は永遠でありますが、では私は何のために生きているのか、何が私を生かしているのか？ 生きていることと死んでいることが認識されることの真の違いは何なのか？

これらの疑問が私の心の特別な片隅にありました。何か忘却の都市、思い起こすことのできないどこか、何かがあるはずだ、との思いがありました。それは私が何か間違ったことをしてしまったのだというはつきりと

しない感情のようなものでした。それが何かは、私の人生において適切な位置を与えられてはいませんでした。何かが失われているが、私にはそれが何であるかが実はわかりませんでした。

ある日私の心に、きつと説明がつくにちがいない、という閃きがありました。私の様々な限界を乗り越えるように働いている、何かの力があるに違いないと。私は名も無く何らかの特別な概念もないそれを単純にこの力 (Power) と呼びました。私は智慧を求めていたのでした。そこで私はなんら特別の形もなく思想もない智慧に呼びかけました。そして、そのような智慧が私に現れたのでした。私は宇宙的次元の感情に触れたのでした。その瞬間私は、ひも理論 を実在自身として自然に了解したのでした。また、私は宇宙が時間を入れて十次元において存在していることも了解しました。我々の感覚機能が探知できるような仕方ではいかなる固形性の質量もないのです。

一切はエネルギーです。我々は光の波動を受信する能力に基づいて三次元的な映像をこの世界に対して描いて実在の断片を捉えてきたに過ぎないのです。我々は世界の見方について三次元的であり、このことが我々の生命の見方となってきました。三次元と時間が我々の感覚器官を通して知られることのすべてでありました。

今日、子供たちは非常に正確に最新の物理学の発見に基づいたスタートレックの物語に夢中になります。しかし、我々がいかに生きたいか、どの程度まで我々が何を実在として捉えるかについては我々の選択なのです。我々が何に価値をおくか、真実に従うのかどうか、因果の法則の宇宙的価値を認めるのかどうかは、我々の選択なのです。

我々が学び経験する決断をすれば、我々自身の日々の人生の道程が、起源・自己認識・究極目標を孕んでい

て、これらの個人的な関心が宇宙的関心へ直接連続していることを発見することでしょう。

我々はどこから来たのか？我々とは何か？我々はどこに行こうとするのか？二五〇〇年以前に、一人の人物、後に彼は「目覚めた者・完成された者・ブツダ」と呼ばれましたが、一切には究極的な始原はないのだと教えました。彼は、いのちは永遠に突き進むエネルギーであり、それが条件によって様々な形態を自らに形成してゆくのだと教えました。彼は、一切の状況は無常であり、始まりのあるものは終わりもあると教えました。これは宇宙についてもあらゆる個人についても同様であります。ブツダの教説は象徴や比喻を用いて当時の人々に明らかになるように記録されました。古代的な言辞にもかかわらず、ブツダのメッセージは明瞭です——究極的始原というようなものはないのだということです。ブツダの教説によって我々は、生死のサイクルが一切衆生、植物や石をも包括しているのみならず、星雲をも包み込んでいることを認識できるのです。一切は因果の法則に従っています。我々はすべて根本的に無限のエネルギーの諸形態なのです。我々一人一人は大海の海流のようなものです。すべての海流のように、我々はそれぞれに特徴をもっていますが、いのちの大海の一部なのです。海の水なしに海流はありません。我々は無限の宇宙の全生命と複雑に連動しています。今日、我々はすべての人間存在が遺伝子においてコード化された特異なカルマの可能性をこの世界にもたらしているのだということを確認することに関心をいただいています。また、その可能性は持続的に文化と社会によって形成されつつあります。

ブツダはカルマの厳密な理解をもった特別な人々の間に生まれましたが、彼は人々に無我と無常という真に宇宙的な宗教を教えることに成功しました。人間の苦悩と涅槃への道との原因を説明しました。自我という障

壁の克服により人は一切の存在が宇宙的調和において一体になる、より開かれた精神世界を獲得できるのだ、と教えました。ブッダがさらに説いたことは、見えない形で、時間的には過去・現在・未来に連なり、空間的には一切の次元にひろがって、ブッダと菩薩の精神的なコミュニティーへ転換された理想のサンガの相が全宇宙なのです。これが『仏説阿弥陀経』の意図であります。

仏教の要諦は「帰依仏・帰依法・帰依僧」であります。それは教理を通してのみならず実際の生活を通して成就されなければなりません。

仏教の真理性は物理的全世界と人間生命の一切を、ひとつの根本的な宇宙的平等の概念へ包括しています。この平等性の理念において仏教は、ヒンズー教も、当時の他のすべての宗教をも否認しました。儒教の仏教への反発は、究極的には仏教の平等の理念に対して向けられていました。同様に、あらゆる上下関係にもとづく社会組織は社会倫理に関するブッダの教説に困難をもつて直面するでしょう。

III

医療の方法としての臓器移植の根本にある考え方は、仏教の宇宙的な平等の根本的概念に矛盾します。我々は一方の生命を救うために一つの生命を時期尚早に終結させなければなりません。この選択は一つの機械によって感知される電磁気による信号という非常に曖昧な基準にもとづいています。もつとも精巧なコンピュータでさえ人間の脳髓の複雑さに匹敵できません。

我々の身体はとてつもなく複雑な宇宙であり、それについて我々の知っていることはほんのわずかです。人間の身体についてなにかを知ることさえ、最新の発見によって我々は驚きの連続を経験しています。しかし、非常に原始的な機械——我々という不完全な存在によって調整され組み立てられた機械——による解説にもとづく「脳死」の基準を開発する決定を我々は時期尚早におこなっています。数週間または数ヶ月の延命を一人の患者に提供するために一人の人に対する最善の入手可能な医療を否定して、我々はヒポクラテスの倫理的原則に反してある人の死を認めることを決定してしまうのです。

二十七年間に及ぶ私の医師としての経歴の間に、医学会は、少なくとも四つの根本的な診断と治療に関する疑問について、意見を完全に變えてしまったのです。私のかつての医学の教授たちは「人間は機械ではない、医者知識は常に限定されたものである」と教えていました。ささいな原因によって予想だにしない悲劇的な死があると同様に、状況の進行した致命的な病気から奇跡的に回復する例は常にありました。高慢にも、貪欲にも、我々は臓器のために人間を殺し、臓器狩の産業を作り出してきたのです。金が世界を動かしているのです。親鸞にとっては、最も悟った人さえも完全には清浄ではありません。というのは、そういった人でもその身体を支えるためには植物や動物からのちを奪わなければならないからです。彼らといえども呼吸をし消化をし排泄をしなければならず、それによって人間の身体に生存してそれを彼らの宇宙としている無数の細菌やウイルスを苦しめているわけです。

親鸞は言います、「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆゑにと仰せ候ひき。」（『歎異抄』）

十章)

眞実信心とは親鸞にとって、単に信仰ではありません。それは阿弥陀仏の働きの、絶対的無義の、他力の、個人的な体験であります。いのちと聖典についての十全の理解が生まれるのは、そのような体験からくるものです。このような他力の体験から、念仏は我々の機能を完全に支える必須のものとして我々の心に浸透して行くのです。

いのちはエネルギーの動的な活動です。一切は因果の法則によつて起こります。結果が熟するまで長い期間を要するものもありますが、因果の法則から逃れるものはありません。それは一切の衆生に関わると同様に宇宙にも関わっています。因果の法則が植物や石に関われば、それは自然の法則と呼ばれます。それがこのころのエネルギーに関われば、カルマの法則すなわち(仏教の)因果の法則と通常よばれます。

意識を獲得し衝動的であるにせよ理性的であるにせよ、決定をおこなうエネルギーは、その原因からいかなる種類の結果が起こるかに影響を与えることができます。決定する意識を保持するこの種のエネルギーが「ころ」(Mind)と呼ばれるのです。

人間の「ころ」が、どのようにして臓器移植のような考え方にいたるのか、私はいぶかしく思います。そのような方法で人の生命を永らえさせる必要はありません。我々は、食事をし飲み物を飲み呼吸をすることにより十分に殺す行為を行っているのです。「ころ」は宇宙と同様に永遠です。いかなる代償を払ってでも、この我々の肉体をひたすら永らえさせるのはなぜでしょうか？ それは我々が精神性と生命に対する尊敬とを

完全に失ってしまったからでしょう。

「火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」(『歎異抄』後序)

- (1) 本稿(英語原文)は二〇〇六年八月二五日、ドイツ、デュッセルドルフの EKOJi で行われた第十四回ヨーロッパ真宗会議で発表された。発表者 Rev. Myoshu Agnes Jedrzejewska, M.D., Ph.D. はポーランド浄土真宗サンガ主管・浄土真宗本願寺派光輪寺坊守である。

- (2) ヒポクラテスの倫理についてインターネットから得た資料(百科事典『ウィキペディア』(2007/05/14 12:42 UTC 版)を参考までに以下抜粋して引用する。

ヒポクラテスの誓い (The Oath of Hippocrates)

(由来) 古代ギリシアの医者集団コス派の文書を中心とする文書群、Corpus Hippocraticum (ヒポクラテス集典)にある。つけられている題名は「誓い」。一般にはこの文書群と同様に「ヒポクラテスの誓い」として流通してきた。ただし、このテキスト自体は、歴史上実在したヒポクラテスよりも後の時代に、コス派よりも後の時代に成立したと考えられている。

この点は、テキストで「医術」という語をもって指示されているものが、現在で言う「内科」に相当するものに限定され、外科的な事柄が拒絶されている事からも推定可能である。何故なら、コス派の医者たちは外科的処置も行なったのであり、又、その処置は優れたものでもあったからであ

る（上記ヒポクラテス集典を参照）。（注 以下の参考文献参照あるいはノート参照）

（医学校での宣誓）一五〇八年、ドイツのヴィッテンベルグ大学医学部で初めて医学教育に採用された。一八〇四年、フランスのモンペリエ大学の卒業式ではじめて宣誓され、以降医者にとって重要なものとして長らく伝承されてきた。一九二八年では北米の医学校の19%で卒業式の誓いとしていたが二〇〇四年では北米のほぼ全ての医学校の卒業式に誓われている。医者集団はそれほどこのテキストを守り重視してきた。この事実をふまえた上で、テキストの内容（たとえば上記の内科重視と外科拒絶）から何が読み取れるのかを考えなければならぬ。

ヒポクラテスの誓い（日本語訳） 現実に医学部で使用されているものではなく直訳したものを記す。

医の神アポロン、アスクレピオス、ヒギエイア、パナケイア、及び全ての神々よ。私自身の能力と判断に従って、この誓約を守る事を誓う。

・この医術を教えてくれた師を實の親のように敬い、自らの財産を分け与えて、必要ある時は助ける。

・師の子孫を自身の兄弟のように見て、彼らが学ばんとすれば報酬なしにこの術を教える。

・著作や講義その他あらゆる方法で、医術の知識を師や自らの息子、又、医の規則に則って誓約で結ばれている弟子達に分ち与え、それ以外の誰にも与えない。

- ・自身の能力と判断に従って、患者に利すると思う治療法を選択し、害と知る治療法を決して選択しない。依頼されても人を殺す薬を与えない。
 - ・同様に婦人を流産させる道具を与えない。
 - ・生涯を純粹と神聖を貫き、医術を行う。
 - ・膀胱結石に截石術を施行はせず、それを生業とする者に委せる。
 - ・どんな家を訪れる時もその自由人と奴隷の相違を問わず、女または男と情交を結ばない。
 - ・医に関するか否かに関わらず、他人の生活についての秘密を遵守する。
- この誓いを守り続ける限り、私は人生と医術とを享受し、全ての人から尊敬されるであろう！
- しかし、万が一、この誓いを破る時、私はその反対の運命を賜るだろう。

(批判) アメリカ合衆国のロビン、マッコレーがこの誓いは文化的停滞 (Cultural lag) の典型例で、誓いの作者はヒポクラテスでなく、男尊女卑で同性愛であるとして批判した。

(批判への反論) 上記批判に対してアテネ大学内の国際ヒポクラテス協会のマルケトスが、誓いの作者がヒポクラテスあるかどうかは別として誓いに示してある医師のあるべき姿は永遠不滅であるとした。

大槻真一郎 (編著) 『新訂版 ヒポクラテス全集 (Corpus Hippocraticum)』 (全3巻)、エンタプライズ株式会社、一九九七年